感化教育の実践家

留岡幸助

（1864 ～ 1934 年）

「家庭にして学校、学校にして家庭、愛と智がいっぱいに溢れたそのような環境のもとで、教師と生徒が一体となって感化教育に当たりたい」

留岡幸助が設立した児童自立支援施設「家庭学校」には、そんな思いが込められている。家庭学校では、養育環境に恵まれず非行に走る子供たちを、指導者とその妻が共同で寝食をともにし、家庭的愛情のうちに善導する。感化の中心にはキリスト教を置き、午前に学習指導、午後には職業教育を行って徳育・知育・体育の発達をはかった。

留岡幸助は現在の岡山県高梁市出身。理髪業を営む吉田満助の次男として生まれたが、生後まもなく親類の留岡金助・勝子の養子となった。1880 年（明治 13）、岡山基督教会の金森通倫牧師らにより高梁にキリスト教が伝えられると、3 年後、高梁教会で受洗した。その後、同志社神学校に入学して新島襄に学び、卒業後、はじめ丹波教会の牧師となったが、金森牧師の勧めにより、'91 年（明治 24）、北海道空知集治監（現在の刑務所）の教誨師となった。過酷な強制労働を強要される囚人たちに接し、彼らの多くが、その生い立ちに問題があることを実感すると、'94 年（明治 27）、渡米し、監獄制度、感化事業を学んだ。日本ではまだ厳罰主義の時代、更生に重点が置かれるアメリカの感化監獄に大きな影響を受け、帰国後、国内に感化院を設立するために奔走。1899 年（明治 32）ついに、東京・巣鴨に「家庭学校」を設立した。日本に感化法ができて公立の施設が法定化される前年のことである。

1914 年（大正 3）、北海道上湧別村字社名淵に国有地の払い下げを受けて、家庭学校の分校と農場を開設。'23 年（大正 12）には神奈川の茅ヶ崎にも家庭学校の分校を作るがこちらはまもなく関東大震災で建物が倒壊して、'33 年（昭和 8）閉校となる。留岡は、たえず学校経営に奔走しながら、これらの学校を指導監督した。

60 歳を過ぎた後も社会事業調査会の委員として社会事業の発展に貢献するなど、終生、少年感化、監獄改良、教化事業に尽くした。

「あっ晴れ岡山人」刊行委員会
『あっ晴れ岡山人』（2010 年）　より